沿　　革

① 開校と変遷

1　山陰国民高等学校（省略表記「国校」）

昭和初期、世界的な経済恐慌は日本農村にも及んで農村は疲弊の極に達した。その経済再生は農政の急務となり、諸施策が打ち出されたが、つまるところは人の養成にあるとの観点から、農村の中堅人物の養成を目的とする研修教育機関が全国に設置されることとなった。

そもそも大正９年、群馬県の篤農家清水及衛氏が産業組合講習会に来県し、山形県自治講習所を紹介したのがきっかけで、有志の人が同所を視察し共感するところが大きかったが、まだ機は熟さなかった。

大正13年夏、農村教育講習会が開催された機会に、同所加藤完治所長の講話を聞き、国民高等学校設立の機運が盛り上がった。

大正15年11月、三徳信用購販売利用組合は県下産業組合に呼びかけて、国民高等学校建設を建議し、実行委員会を設けてこれに付託した。

昭和２年、実行委員会は郡内各団体幹部と期成同盟会を組織し、財団法人山陰国民高等学校設立の評議員を決定するとともに、町村長会1,500円、産業組合部会1,500円、自治協会100円、郡農会150円の拠出を決議した。

当初は赤碕町の農林省種馬所跡地を候補地としたが入手がむずかしく、陸軍演習地跡であった関金町の現在地となった。

目的は、農村の中堅人物の養成にあり、どのような境遇のもとでも徐々に家や村の改善の実をあげられるような、堅実にして有為な人物の養成を目標とした。修業年限は１年で、寄宿舎に収容し、なるべく先生と生徒が起臥寝食・農作業を共にし実践教育を行うこととなった。

山陰国民高等学校は山形県自治講習所（大正４年開設）、日本国民高等学校（大正15年認可、昭和２年開校）に次ぎ全国で３番目の国民高等学校として、昭和４年２月に開校した。

・卒業生　47名

2　県立修練農場（省略表記「修農」）

昭和９年、国は中堅農業者の養成を目的として各府県に県立修練農場を設置することとし、初年度は25県に設置された。山陰国民高等学校は全施設を無償で鳥取県に寄付し、県立修練農場として新発足した。修業年限は１年で、高等小学校卒業以上の学力を有する18歳以上の男子で、将来郷土農村にとどまり、農村の建設に挺身すること等の入場条件があった。

なお、満蒙開拓移民訓練、戦時下にあっては、食糧増産隊の活動の場ともなった。

・卒業生　延べ385名

（うち研究科28名。そのうち５名は研究科だけの課程）

3　県立経営伝習農場（省略表記「経伝」）

昭和23年、農業改良助長法の成立により普及事業が発足し、昭和24年農林次官通達でもって修練農場は経営伝習農場と名称が変更されることとなった。本省主管局も開拓局から農業改良局に、本県でも開拓課から農務課へ移管された。

経営伝習農場の発足に当っては、当時、連合軍司令部はかなり批判的だったといわれるが、普及事業の一環としての農村側の受け皿づくりの場として理解が得られたようである。農場の運営に当っては、修練農場の鍛錬主義的なものから経営合理主義的なものへの方針変更がなされた。

修業年限は１年で、中学校卒業者を対象とする本科と、本科卒業者または高等学校卒業者を対象とする研究科が設けられた。

昭和36年には農業基本法が制定されたが、この年の本科入学者数は６名で、にわかに存廃が問題とされることになった。その後、同窓会の陳情、特に中部町村会長を歴任された三朝町坂出雅己町長の熱意、石破二郎知事の深い理解により、整備拡充する方向が打ち出された。

昭和37年以後、農村青年研修館、農業機械技術者養成施設、農業専修学園施設など国の補助も得られるようになり、施設の整備が進んだ。

・卒業生　延べ534名

（うち研究科他113名。そのうち22名は研究科だけの課程）

４　県立農業経営大学校（省略表記「経大」）

農業の規模拡大、専門化、機械化の進展の一方で、高学歴化が進み、高等学校卒業者を対象とした農業者の養成が要求されるようになった。このため、農村において指導的役割を果し得る農業者の養成を目的に、昭和42年に２年制の農業経営大学校を発足した。農業経営大学校では、女子学生の受け入れを開始し、また専門別の班を設けた。

発足当時は１年次在校、２年次在家の教育形態であったが、昭和47年度からは２年次の在家をやめ半年間の農家留学、49年度からは３ヶ月間の農家留学を行った。

なお、農業経営大学校のはじめ２年間は中学校卒業者を対象とした実科を併置した。

・卒業生　436名

（うち実科39名。そのうち17名は経営伝習農場本科卒業生）

５　県立農業大学校（省略表記「農大」）

国際化の中で、大幅な貿易黒字を背景に日本は経済大国といわれるようになり、貿易自由化の進展、米の生産制限、農畜産物価格の伸び悩みや低下などから農業後継者は激減し、農村における兼業化が進んで、地域農業の担い手の確保が深刻な課題となるようになった。

このため、本校卒業後直ちに就農することを期待するだけでは、現在ならびに将来にわたって地域の農業を支える有為な人材の確保が困難となってきたことから、農業者となる人はもとより、農業関連の仕事に就きながら、農業の指導的役割を果たすことのできる人材の養成もあわせて行うことを目的に、昭和59年、現在の農業大学校が発足した。

１年次の前半は、共通科目としてのオールラウンド学習を取り入れ、約40日間の農家留学研修の後、１年次の後半から２年次にかけて専攻学習を進めることとなった。

また、人事院規則による短期大学卒業者と同等の処遇を受けることができるようになった。

～60周年記念以降～

校舎・学生寮等の老朽化が進み時代に対応した十分な教育が行えない事などから、平成元年頃から農業大学校の整備の機運が高まり、平成３年に至り農業大学校運営協議会が設置され校舎の改築等を中心とした整備計画がまとめられた。

平成４年度に至り「21東ほうきふるさと構想」の１つの柱として農業大学校の全面的な見直し、改革整備の方針が示された。

整備はふれあい農業学園として、学生教育の農業大学校部分の他に農業における生涯学習・国際交流の機能を有する国際農業交流館を内容とするものであった。

このため、ふれあい農業学園整備委員会で検討を重ね平成６年には構想の最終案、基本設計が出来上がっ

た。また、管理運営体制及び教育内容についても方針決定がなされた。

☆　整備の理念

青年農業者の養成を基本とし、幅広い人材育成や環日本海交流の拠点として利用出来る「開かれた農業大学校」を目指す。

☆　建築の基本方針

地域の風景にマッチしたデザインとし既存樹木はなるべく残すとともに、出来る限り木材・瓦を使用する。なお、全寮制の学校であるので寮から廊下伝いに教育棟に行ける構造配置とした。

☆　工事の概要

⑴　工期：平成７年11月～平成９年９月　　落成式：平成９年10月28日挙行

⑵　総事業費：約49億円

☆　改革の内容

平成９年３月28日「鳥取県立農業大学校管理規則の一部を改正する規則」が公布された。（鳥取県規則第26号）その内容は、

⑴　養成課程：人気の高い花き科を設置し、教育内容も鳥取らしさ、語学等を充実

⑵　研究課程の設置：養成課程卒業以上の者を対象に２年間で高度な教育を行う

⑶　専門技術課程の設置：１年間で即就農に必要な専門的先進的実践技術を習得する

⑷　研修課程の充実：一般県民から高度な農家対象の研修まで幅広く内容充実

⑸　国際交流部門の充実：農業分野を始め、農業以外の日本文化講座等も開催する

平成10年５月より、本県の友好交流先であるモンゴル中央県から農業指導者などの公務員を受け入れ、野菜の生産技術等の更なる向上と効率的な指導方法等を習得することを目的に農業大学校での研修を開始した。開始当初は約半年間の研修（うち約１ヶ月は日本語研修）だったが、平成20年からは約２ヶ月間の短期研修となっている。

～70周年記念以降～

平成12年に林業技術者養成のため専門技術課程森林科が新設された。以後、林業技術者の育成を続け、平成19年を最後に廃止された。

平成14年から兵庫県加古川市にあるスーパーマーケット（イトーヨーカ堂）で、本校産農産物を養成課程の学生が販売する体験実習が始まった。

平成15年３月に寮室30室３階建ての女子寮が完成し、女子が移動した。同時にそれまで入寮できなかった研究課程、専門技術課程の学生も入寮できるようになった。

就農を目指す研修生や、農業体験の希望者が増加したため、平成17年５月に農業学習館を建設し、研修生の体験学習の場として活用している。

平成18年度には、平成13年度から開始されている農業専門家派遣事業（モンゴル中央県に農業専門家を派遣し、中央県の一般農家等に対して農業指導講習会を実施するほか、これまで鳥取県が受け入れてきた農業研修生のフォローアップを行い、中央県の農業レベルの底上げと鳥取県の知名度向上を図る事業）に農業大学校から二人の助教授（山口祐助氏、山嵜勝一郎氏）が派遣され現地指導を行った。

平成20年２月に本校養成課程卒業生に専門士（農業専門課程）の称号を付与することを認可する文部科学省の官報が告示された。これに付随して３月に鳥取県立農業大学校管理規則が一部改正され、正式に専修学校として位置づけられ、養成課程卒業証書の文面に専門士（農業専門課程）の称号が表記された。

平成20年４月に、主に次の事項を改正した。

①養成課程の果樹科、野菜科、花き科、畜産科が養成課程農業経営学科となり、果樹コース、野菜コース、花きコース、作物コース、畜産コースの５つの専攻コースとなった。

②研究課程、専門技術課程は廃止された。

③研究課程のうち就農研修部分は短期研修科となり３ヶ月、６ヶ月、12ヶ月の３コースとなった。

④養成課程の全寮制が廃止され、希望者に対する許可入寮制となった。

⑤平成20年度入学生から社会人特別入学枠が設けられた。

平成20年６月に、学生が丹精込めて作った農産物を農大内で自らの手で販売する初の「農大市」を開始し、学生自らが商品のパッケージやポップ広告の作成・販売等を行っている。

～80周年記念以降～

平成22年度には従来の職名「助教授」が「准教授」に改名された。又、養成課程に30名の定員を上回る33名の新入生が入学した。

平成23年度には見直しを検討してきた新カリキュラム（実習時間の増、６次産業化や社会貢献活動のカリキュラムへの導入等）を養成課程１学年に摘要実施した。又、学校の外部評価を開始した。

平成25年12月には、管理棟や学生寮の給湯用の木質チップボイラー施設が完成し、点火式に招待した関金小学校の児童と学生会役員が種火をたいまつリレーしボイラーに点火した。この他、野菜・花きハウス暖房用に木質ペレットボイラーや地中熱ヒートポンプも完成した。

平成26年３月には野菜コースの職員が農林水産部長表彰を受賞した。これは平成20年度から６年連続で本校の学生が中四国ブロックの代表として全国プロジェクト大会で発表。特に野菜コースの学生を平成22年度から４年連続の出場に導き、うち３名を上位入賞に導いた優れた指導成果が評価されたもの。

平成26年８月には、農業法人等への雇用就農が重要な進路の一つとなる中にあって初めて雇用就農情報交換会を開催し、農業法人等と学生・研修生の情報交換及び個別相談を行った。求人を検討する農業法人等15社の参加があった。

平成27年には就農を目指す社会人向けの研修を改編して充実させることに伴い、研修科に訓練指導員２名（非常勤職員）、研修調整員（非常勤職員）２名が配置された。具体的には、短期研修科（３ヶ月、６ヶ月、12ヶ月間の研修）を改め、講義と校内での実習によって農業の基礎的知識と栽培（飼育）の基本技術を学ぶ12ヶ月間の「スキルアップ研修」、１年間先進農家の元で実践的に学ぶ「先進農家実践研修」、３ヶ月間の「アグリチャレンジ研修（公共職業訓練）」の３種類の研修を開始することとした。

同年11月には全天候型演習施設（大型テント施設タスコドーム）１棟（227.9㎡）を新設し天候にかかわらず農作業や機械操作実習を行うことができる環境を整備し、産業人材センター倉吉校の委託を受け、公共職業訓練「アグリチャレンジ研修」を11月５日に開始した。この研修は農業従事希望者の基礎訓練として農業に関する基礎知識と農作業に必要となる基本技能を習得できる３ヶ月間の訓練であり、第１期生として募集定員20名に対して18名が入校した。

平成28年２月１日には新たに創設した先進農家実践研修の第１期開校式を行った。この研修は、就農希望地において先進農家の元で実践的な技術と経営ノウハウを学ぶ研修で、市町村、農協、農業改良普及所等の様々な機関からなるチームが農業経営開始をサポートすることが特徴である。第１期生は２名でそれぞれ北栄町長芋生産部、湯梨浜町ブドウ生産部の先進農家のもとで１年間の実践的な研修を開始した

平成28年４月１日、前年度から始まった公共職業訓練アグリチャレンジ科（アグリチャレンジ研修から名称変更）について、農作業の基礎技能を定着させるため、訓練期間を４か月に延長、１期定員を25名に増やす見直しを行うことに伴い、訓練指導員（非常勤職員）１名が増員配置された。

平成28年８月１日、鳥取県で初めて食の６次産業化プロデューサー育成講座（レベル１から３の認証講座）が本校を会場に開催されることとなり、12月までの15日間の研修が始まった。受講者は本校の学生・研修生で希望する者10名、一般参加者18名、農林水産分野の県内高校生６名と県職員12名の合計46名であった。

平成28年10月21日、午後２時７分鳥取県中部地域を襲った最大震度６弱の地震により本校も大きな揺れに

見舞われた。人的な被害はなく、当日は推薦入試の日であったが、試験も無事終えることができた。瓦の脱落や水道管、冷暖房配管の損傷、晩生梨「王秋」の落果などの被害があった。水の確保が十分できなかったことからアグリチャレンジ科と研修課程は１日、養成課程は３日間の休校とした。

平成28年12月16日、平成27年度決算審査特別委員会報告が議会に提出され、農業大学校について「農業大学校職員の学生指導のスキルアップならびに農業高校と農業大学校をつなぐ連続性のある教育実践ができるよう、農業大学校と農業高校の間に、可能な範囲での人事交流、情報共有など連携のあり方を検討すべき」との口頭指摘がなされた。

平成29年４月１日、鳥取県立鳥取湖陵高校の脇清貴教諭が教員現職教育内地留学制度を利用して農業大学校に派遣され（身分は教諭のままで農業大学校への併任発令）、１年間の研修を開始した。

平成29年４月11日、鳥取県とモンゴル中央県の友好交流20周年を迎え、モンゴル中央県からバグジド・バトジャルガル知事率いる９名の代表団が来県され、満開の桜が咲く農業大学校で記念行事と農場視察が行われた。記念式典では、中央県からモンゴル中央県親善協会と農業大学校に名誉勲章が授与された。中央県知事、平井知事、河本親善協会会長らが、円形広場に桜（ソメイヨシノ）を記念植樹された。

平成29年４月に国家戦略プロフェッショナル検定の食の６次産業化プロデューサー育成プログラム実施機関の認証を取得し、「食の６次産業化プロデューサー育成講座（25科目）」を開講した。農業高校から51名、農大生３名、一般４名が受講した。

平成29年３月に時代に即した学校教育とするために管理規則改正を行った。食の安全、労働安全、環境保全を確保するグローバルGAPの実践を行う「生産工程管理」を新たな科目として追加した。４年制大学編入に対応したカリキュラムの統合、名称変更を行うとともに科目毎の時間数を変更した。

平成30年４月に県組織定数の改正により次長が教務研修参事を兼務することとなった。これらに伴い正職員が２名減となった。

平成30年４月からスキルアップ研修に、県内で栽培される主要野菜４品目（スイカ、白ネギ、ブロッコリー、ミニトマト）の栽培管理技術を習得する短期研修（各４カ月間で５期）を新たに開講した。

② 年表

【山陰国民高等学校時代】

昭和２．１．８	財団法人山陰国民高等学校の設立を目的として郡内団体幹部が集まり、設立期成同盟会を組織して準備に着手した。
３．８．７	倉吉町産業組合県連合会内に置かれた期成同盟会に、山形県自治講習所より岩本泰治氏が書記として着任し、開校の準備に当たることになった。
４．２．１	山形県自治講習所教師早川一男氏が初代校長として着任、校長以下職員４名の体制が整った。
４．２．11	紀元節（現建国記念の日）の佳節を期して第１期入校式を挙行し、生徒７名と父兄、期成同盟会役員が出席した。
４．２．22	快晴温暖な天候のもと、日本第３番目の国民高等学校として開校式を挙行。出席者は、加藤完治日本国民高等学校長、橋本傳左右衛門京都大学教授、田中・山枡両鳥取高農教授、県学務部長外70余名が出席した。
４．４．５	職員・生徒合作の文集「天地」第１号を刊行。
４．８．４	第１回短期講習開催。７日間で40名が受講。 ・日課＝朝：やまとばたらき、午前：学科、午後：開墾、夜：座談会 ・初年度夏作面積 水稲：８反、陸稲：１町２反、豆類：５畝、いも類：５畝、すいか：８畝、かき：２反
４．12．１	日本国民高等学校旅行隊来校し、本校より７名が合流して朝鮮・満州の各地を見学して翌年元旦に帰校した。
５．２．８	第１期生の修了式を行う。
５．３．21	第２期入校式が行われ、東京、兵庫、熊本の出身者を含め10名が入校した。
６．３．１	初のメス牛が誕生し、学校挙げて大喜びとなる。
６．５．12	農林省石黒忠篤農務局長（のち農林大臣）来校し、餅をついて土間で話しを聞く。
６．７．３	早川校長退職し、岩本泰治氏が校長代理に就任する。
６．10．	２日がかりで全員が鳥取高農、農事試験場を見学。吉岡村の長柄稚蚕共同飼育所に１泊し、夜中３時半の起床ラッパに驚かされる。徒歩で鹿野、三徳、三朝を経て倉吉に着き、バスで関金に帰ったのが午後８時で、全員よく歩きよく疲れたという。

【県立修練農場時代】

昭和９．４．	中堅農業者の養成を目的として、国は各府県に修練農場の設置を指導し、初年度に25県に設置された。本校は全施設を無償で鳥取県に寄付し、県立修練農場として新発足した。

9．9．	連日大雨のため小鴨川が氾濫し関金・倉吉一帯で大水害が起こり、耕地や家屋が流失した。
10．4．	毎年の行事として、北海道を除く鳥取以東の修学旅行20日間を行う。各県の修練場に宿泊し、将来の農業について意見交換を行った。
11．8．	東伯郡一円から参加できる盆恒例の地元地蔵講大相撲に農場チームを組んで出場し、好成績を収める。
12．4．	第２代場長（校長）に関谷良三氏が就任する。
13．7．	関谷場長（校長）退職し、第３代場長（校長）に山崎永雄氏が就任する。
13．9．	短期講習生の宿舎として60坪の日輪兵舎、40坪の開拓農民訓練宿舎を建設し、以後、県下一円の農村青年及び農民の短期講習、満州開拓移民の訓練を継続的に行う。
14．7．	満州建設勤労奉仕隊（鳥取、島根、和歌山、奈良の青年150名）の中隊長として、山崎場長（校長）は満州国浜江省ザルトムで２ヶ月間勤労奉仕に従事する。
15～16	食糧増産報国推進隊に生徒も参加し、県内各地で食糧増産に励む。
18～20	食糧増産隊（農兵隊）の基地となり、簡易宿舎１号、２号を建設し、ここを拠点として県内各地の開墾、食糧増産に活躍した。
21．11．	山崎場長（校長）の退職にともない、第４代場長（校長）に渡部一真氏が就任する。
21．12．	県内の開拓入植者の訓練も行うこととなり、名称を県立開拓増産修練農場と改め、入植課の所管となり修練農場関係職員と開拓増産関係職員とが併設された。
22．4．	基幹開拓者養成所が併設され、場長が兼務した。
23．7．	山陰国民高等学校創立20周年記念式典を行う。講演会に京都大学橋本教授、八ヶ岳中央修練農場久保先生、鳥取農専遠山先生などを招き、また、農産物品評会、畜牛品評会、農機具展示会、映写会、相撲大会などを開催した。

【県立経営伝習農場時代】

昭和24．8．	名称を経営伝習農場と改め、普及事業の一環として扱われることになり、県では農務課の所管するところとなった。
25．1．	矢送村（現関金町）黒谷の山林３町８反３畝、同関金宿池谷の山林４反３畝を購入し、薪炭雑用に供することになった。（後に昭和39年県林務課の所管となる）
25．6．	渡部場長（校長）の退職にともない、第５代場長（校長）内田安悦氏が就任する。
26．4．	畑の周囲の道路沿いに麦苗を植え付ける。
26．6．	30万円の予算でオート三輪車を購入した。これにより、馬車にドラム缶を積んで倉吉まで一日がかりで往復したブタの残飯運びが能率化された。
27．3．	畑３町５反、水田２町２反を正式に購入。畑に二十世紀梨を新植し、残り

を飼料畑にあてた。

27. 4. 天神野土地改良区は正門横の水路に分水ロータリーを設置するとともに、水路を整備した。ロータリーからの分水口の大きさは関係水田面積に応じて設定された。

30. 3. 教室が建設された（この教室は経大時代には野菜教室に当てられ、昭和60年度に本館が建設されたため撤去された。）

31. 4. 本館及び大家畜舎を建設し、乳牛飼養の準備を整える（この本館は経大時代には果樹教室、一時は食物実習室にも当てられたが、当時の本館の建設により撤去された。大家畜舎は県道沿いにあったが、当時の牛舎の建設により撤去された。）

32. 4. 緬羊、山羊を処分して乳牛２頭を導入した。

34. 7. 日野郡江府町出身の生徒が仙隠溜池で水死する。

35. 4. 馬を処分して耕うん機を導入した。

37. 3. 国の助成を受けて、初めての鉄筋コンクリート２階建ての農村青年研修館が竣工し、短期研修生の宿泊研修施設が整うとともに、付設された衛生的な食堂が利用できるようになった。（この食堂は昭和56年度に女子寮を兼ねて改築された。）

38. 3. 企業的生産教育の施設として山陰初のルーズバーン牛舎を建設し、岩手県より乳牛８頭を導入した。
長期生寮舎位置にルーズバーン牛舎を建設したのにともない、町道に沿って鉄筋平屋建ての寮舎を建設した。この寮は、経大の発足とともに半分を女子寮に改装利用したが、昭和56年度に同位置に新男子寮が建設され、撤去された。

38. 8. 農業指導者養成所が併設され、農村青年研修館を拠点に在村中堅青年を対象に高度な経営技術の習得を目的とした研修が始まった。

38. 12. 県大型農業機械センターが設置され、機械整備舎・格納庫の建設とトラクター・アタッチメント・工具類の整備ができ、農業機械研修を開始した。

39. 4. 大型農業機械の実習用ならびに酪農飼料基盤確保にあてるため、関金町泰久寺の離農跡地4.9ヘクタールを買収して農地整備をおこない、牧草を作付けた。

40. 3. 農業専修学園整備事業により、鉄筋２階建て170坪の本館を建設した（この建物は当時の本館の建設により、教育棟改装整備された。）

41. 3. 文集「草の芽集」を発行（翌年第２集まで）

41. 4. 内田場長（校長）の退職により、第６代場長（校長）に桑田明氏が就任した。

41. 9. 昭和42年度より農業経営大学校の発足が決定的となったため、諸施設の整備に着手した。
・50人収容（１室４人）の鉄筋２階建男子寮の建設
・グラウンド東側に職員校舎を建設（鉄筋２階建：校長用１棟、職員用４戸建１棟）
・旧長期生寮の半分を女子寮に改造。
・肉豚舎１棟（60坪）を建設。

・成鶏舎５棟（2,500羽収容）、大・中雛舎６棟、育雛舎・管理舎２棟。
・なし44a、くり16a、かき17aを新植し、果樹園規模を拡大。
・水田3.8haの基盤整備を行ってほ場区画を拡大し、農道の拡幅、水路の整備によりトラクターによる一貫作業を可能にした。
・開拓地飼料料畑に簡易格納庫を設置。

この年、天神野土地改良区が仙隠溜池の堤防漏水防止施工を計画し、本校用地の一部堀削、資材運搬、資材置き場等の便を提供したことに対し利用料を支払うことを条件に、好意的に溜池漁業権を永久的に本校に与えることを約し、以後職員親睦会の管理下において種鯉を放流し、秋の堤干しは恒例行事となった（平成19年まで続く）。

【県立農業経営大学校時代】

昭和42. 4.	農業経営大学校として新発足し、２年制度となり、女子の受け入れも開始する。中学校卒業者は42・43年度の２カ年実科として併置した。桑田場長が校長に就任する。学校組織は総務・教務・経営の３課が設けられた。 校章を制定。
42. 6.	自動車はライトバンとトラックが新しく配置された。
42. 6. 12	農業経営大学校開校記念式典が挙行され、石破二郎知事をはじめ91名の来賓が出席した。 知事は本館前にヒメラヤシイダを記念植樹する。
42. 12.	文集「あけぼの」を創刊（現在第31集まで発行）。
43. 2.	校歌を制定（作詞：山下清三氏、作曲：牧野晋氏）。
43. 3.	グラウンド隣接水田14aを買収してグラウンドを拡張した。
43. 4.	中部農業経営圏整備事業で営農研修館が竣工し、初代館長に谷川建夫氏が就任した。講堂（体育館）が付設されたことにより、課外のクラブ活動が活発に行われるようになった。
43. 5.	関金町から本校正門までの県道が完全舗装となった。 62㎡の花きガラス温室設置（昭和61年撤去）。
44. 4.	桑田校長の退職により、第７代校長に池田稔夫氏が就任する。
44. 5.	トラクターの転倒事故により、岸本貞治主任殉職される。
45. 4.	池田校長の退職により、第８代校長に井上正敏氏が就任する。
47. 4.	教育制度を改正し、２年次の在家期間を廃して５ヶ月の農家留学研修、専攻部門の毎月１回の郊外学習を制度化した。また、野菜部門を新設した。
47. 11.	国の助成を受け、トラクター２台をはじめ酪農・果樹関係の作業機を導入し、格納庫２棟を新設した。また、野菜の出荷調整室も新設した。
48. 12.	野菜施設に加温式鉄骨ハウス１棟（360㎡）を新設し、これにより加温、無加温のハウス施設と露地の基本体制が整った。 繁殖豚舎が老朽化したため、これを撤去して、群飼豚房とフロアヒーティング分娩房を整えた新豚舎を設置した。 男子寮、女子寮のそれぞれ１室を改造して和室の談話室を設け、テレビ・

碁・将棋等の娯楽用具を整えた。
養鶏部門の廃止決定。

49. 2. くり園を廃し、跡地に親水・豊水を新植して、42年植え付けの幸水とともに三水が揃った。

49. 4. 谷川営農研修館長の退職により、第２代館長に塘佑志郎氏が就任する。食堂の模様替えを行い、環境を整える。

50. 4. 入校生が急増した。
学生の自動車校内持込みを許可制のもとに承認する。

51. 11. かき（富有、伊豆、西村早生）を新植する。

52. 2. かきの老木（国校１期生が開園植栽）を廃し、跡地にぶどう（巨峰、デラウェア）を新植し、南西傾斜畑が果樹団地としてまとまった。
上旬降り続いた雪は積雪96㎝に達し、鉄骨ハウスが倒壊した。

52. 5. 農業改良助長法が一部改正され、長年懸案となっていた農業者研修教育施設の法的位置づけがなされ、通称「県農業者大学校」と呼ばれることとなった。これによって、運営費、施設設備費が国庫負担金の対象となることになり設備の目安がつき易くなった。
・初年度認定分
　マイクロバス　　26人用
　乳牛成牛舎　　鉄骨一部２階建、延べ560㎡

53. 2. 県費により鉄骨ハウスを再建した。

53. 3. 水田区画内を通る野菜施設横の町道が舗装された。
乳牛舎が完成し、乳牛を移動。

53. 4. 農業改良助長法の改正により、実習指導員（助手）が設置できることになり、２名の助手が発令された。
農業指導者養成所を廃止し、農村青年短期研修は大学校の業務に包含された。

53. 11. 開校50周年記念式典を挙行。初代校長早川一男氏ほか来賓・旧職員80名、卒業生130名が参集した。
・記念事業
　冊子「修農五十年」（会員名簿入り）の刊行
　記念碑の建立（碑名「修農」平林鴻三知事揮毫）
　記念品（関金町在住の岸信先生の手による秀峰大山の版画）の制作

54. 3. 乳牛舎に接して肉牛舎を建設。

54. 6. 成鶏舎を撤去。

54. 9. 西日本ブロック農業大学校校長会を開催する。

55. 6. 営農研修館に10名の中国農業研修生の事前研修を受け入れる。

56. 3. 新女子寮が完成し、これに併設された食堂・厨房が利用できることになったため、旧食堂は撤去。

56. 4. 井上校長退職により、第９代校長に塘佑志郎氏が就任する（営農研修館長兼務）。
農林水産省は、農業者と農業の指導者をあわせ養成する新農業大学校の整備方針を発表した。新農業大学校は、高等学校卒業者を主たる対象とする

	養成課程と、農業青年・農業者等を対象とする研修課程を併設することとなった。
	営農研修館に前年同様、中国農業研修生10名を受け入れる。
56. 5.	大栄中学校２年生の農業体験学習の受け入れ始まる。
56. 7.	新農業大学校への改組移行について検討を開始する。
57. 1.	野菜施設に接して野菜現場教室を完成した。これにより、生産現場に密着した学習が可能となった。
57. 2.	旧女子寮跡に新男子寮が完成した。
57. 10.	新農業大学校案が承認される。
58. 1.	塘校長の退職により、第10代校長に清水寿美氏が就任する。
	第３代営農研修館長に中山敬彦氏が就任する。

【県立農業大学校時代】

59. 4.	農業大学校が新発足し、養成課程に果樹科、野菜科、畜産科が置かれた。
	経大時代の教務課と経営課を統合して教育部が設けられ、校長・次長のほか、教育部に部長・教務主幹が設置された。
	経大第１学年の修了者は、農業大学校第２学年に編入することになった。
	校歌は原曲のまま作詞者により歌詞の一部を修正。
	開拓地の傾斜荒廃地にギンナンの苗木を植栽。
60. 3.	果樹園に接して果樹現場教室が完成した。これにより、果樹についても生産現場に密着した学習が可能となった。
	本校用地を取り込んで県道の拡幅改良工事が完成。
60. 4.	清水校長の退職により、第11代校長に田中道宣氏が就任する。
60. 5.	学生の安全運転協議会を組織する。
60. 1	関金町が、わかとり国体の山岳競技の開催地となったため、営農研修館を選手の宿泊に供用した。
61. 2.	本館を新築し、教育棟を整備し、また、本館、教育棟、寮、営農研修館を渡り廊下で接続した。
	本館前の記念碑、樹木等を移転し、造園を行う。
61. 4.	中山館長の退職により、田中道宣校長が館長兼務となる。
61. 7.	農業大学校旗、クラブ旗を整備。
61. 8.	大山小学校６年生の体験学習を受け入れる。
61. 10.	乳牛舎の搾乳パイプラインを更新する。
62. 3.	乳牛舎の近くに畜産現場教室が完成した。これにより、各科とも生産現場に近いところでの学習が可能となった。また、畜魂碑を建立する。
62. 4.	田中道宣校長の退職により、第12代目の山崎洋次校長が営農研修館長を兼ねて就任する。
62. 5.	中国河北省と鳥取県の友好県省締結による河北省農業研修生受け入れ事業が実施され、事前研修、集合研修を通じて営農研修館に受け入れる。
62. 10.	パソコン３台を導入し、コンピューター学習を開始した。

62. 11.	県農林水産祭の啓発展示コーナーに参加出品し、参観者の関心を呼ぶ。
63. 2.	牛舎のバーン・クリーナーを更新。
63. 3.	野菜科に養液栽培用ガラス温室１棟226㎡を設置した。
63. 5.	中国河北省農業研究生は前年同様に受け入れる。
63. 6.	鴨川中学校１年生の農業体験入学を受け入れる。
63. 10.	マイクロバスを更新し、30人乗りとなる。
63. 12.	パソコン３台を追加導入した。
平成元. 1. 8	昭和天皇が昭和64年１月７日崩御され、１月８日より年号が「平成」に改まる。
元. 3.	機械現場教室が完成した。これにより、機械整備舎の利用に比べ暖房、照明、騒音などの環境が改善され、修理用ピットも設けられたことから学習能率の向上が図られた。
元. 4.	研修課程を整備し、農業公開講座を開設することになった。この制度により、総合講座に１名を１年間受け入れることにしたほか、メニュー方式の短期コースを設けるとともに、従来からの農業機械研修も組み入れ拡充した。 水田区画の土地について、地元天神野土地改良区からの要望を受けて県営圃場整備事業により、平成元年から一部平成３年分けて再整備することとなった。これにともない農家の圃場での飼料生産と稲作を行うことになった。
元. 5.	中国河北省農業研修生受け入れ事業は、７ヶ月のうち本校で６ヶ月を受け持つこととなり、研修が始まった。
元. 7. 5	創立60周年記念式典が挙行された。 西尾鳥取県知事、花本県会議員、坂田関金町長、小林県町村会長等来賓を始め、卒業生90名、旧職員20名、在校生等総勢210名で盛大に開催された。 ・内容：式典、記念誌の発行、校門門柱版の鋳造、記念品（風呂敷）
元. 7. 14	校門に門柱版を取り付けた。
元. 7. 25	第25回献血運動推進全国大会において厚生大臣表彰を受賞した。 ・知事室において伝達表彰を受けた。
元. 7. 28	八ヶ岳中央実践農業大学校で開催された全国農業大学校交換大会の技術競技において１位を獲得した。
元. 10.	水田ほ場整備が始まった。
2. 6. 9	強風によりビニールハウスのビニール破損、梨落果など被害を受けた。
2. 7.	県第６次総合計画における農業大学校整備の校内検討を開始した。
2. 9. 13	中国・四国ブロック校長・同窓会長会議を本県で開催した。
2. 11.	国家公務員３種試験５名合格、２種に１名が初めて合格した。
2. 11. 12	天皇即位の礼。
2. 11.	農業大学校運営協議会準備会を開催し、農大運営についての検討が始まった。
3. 1.	農業大学校運営協議会幹事会が開催された。
3. 2.	湾岸戦争勃発
3. 3. 22	農業大学校運営協議会設立委員会が県庁において開催された。
3. 4. 1	県の定期人事異動により、山崎校長は食品加工研究所長に転出、第13代目の原田信之校長が営農研修館長をかねて就任する。

３．５．24	農業大学校運営協議会アドバイザーグループ打ち合わせ会が開催された。
３．９．10	農業大学校運営協議会最終整備案が確定し、今後は本課サイドで検討されることとなった。
４．７．８	岐阜県立農業大学校との交流会（第１回）を本校で開催した。 毎年持ち回りで４回開催することとなった。
４．７．26	こども体験隊（小学６年70名）を１泊２日で開催した。
４．８．18	若い農業者就農対策事業（関金町実施）の一環として神戸大学学生９名が本校で体験学習をした。
４．12．１	中国黒竜江省から酪農研修生２名が来校し平成５年３月末日まで研修した。
４．12．18	プロジェクト発表会に初めて保護者も出席することにした。
５．４．１	県の定期人事移動により、原田校長は鳥取地方農林振興局振興課長に転任、第14代目の米澤輝夫校長が営農研修館長をかねて就任した。
５．４．27	関金町畜産祭りが本校で開催された。
５．７．13	第１回ふれあい農業学園構想研究会が県庁で開催され、新しい構想のもとでの整備に向けて具体的な取り組みが始まった。
５．７．26	ふれあい農業学園構想について丹青研究所と打ち合わせが行われた。
５．８．２	ふれあい農業学園構想検討会を本校で開催。以後数回にわたる打ち合わせを重ね計画を樹立した。
５．８．	“フルーツコレクション倉吉98”農業博覧会が倉吉市で開催された。
５．９．８	西日本ブロック果樹研修会を本校で開催した。
５．11．16	畑作振興施設（バイオテクノロジー施設）が農林水産省の補助で完成し、紫原農林水産部長ほか来賓の出席をえて竣工式を挙行した。
５．11．26	修農祭の一部がNHK“ふるさと秋列島”で全国生中継された。 山川アナウンサー、越前屋俵太等が来校した。
６．２．23	国のカリキュラム基準改定に伴い本校の内容改定作業に着手した。
６．３．16	第３回ふれあい農業学園整備委員会が開催され建物等の整備計画が承認され、管理運営体制については平成６年度に検討を行うこととなった。
６．４．	女子学生が増え過去最高の７人が入学した。
６．４．27	ふれあい農業学園整備構想最終案が確定した。
６．６．29	ふれあい農業学園基本設計最終版を受領した。
６．７．	校内の測量が始まった。
６．７．26	第３回岐阜農大との交流会を鳥取市少年自然の家で開催した。
６．７．	整備後の管理体制についての検討を重ねた。
６．８．	観測史上最高の記録的な猛暑。
６．８．	建物の実施設計についての打ち合わせが続いた。
６．10．１	鳥取県畜産ふれあい祭りにおいて本校から泊小学校に貸し付けの牛「モモちゃん」が特別賞を受賞した。
６．10．17	中国地区農業大学校交流会において本校がバレーボールで優勝した。
６．12．	農業改良助長法改正に伴うカリキュラム改定作業に取り組んだ。
７．１．13	ふれあい農業学園に関する庁内関係課長会議が開催され国際農業交流館の管理主体は農林水産部とすることに決定された。

7．1．	記録的な大雪で県東部地区のなし園に大きな被害が発生した。
7．1．17	阪神・淡路大地震が発生した。
7．1．	女子学生の急増（７年度の在学15名）に伴い男子寮２階を女子寮に改造することにした。
7．1．29	関金町農業振興大会が開催され本校から朝日暁子が意見発表した。
7．2．	記録的な大雪（鳥取市89センチ、関金町50センチ）となった。
7．3．	研究課程設置についての検討並びに打ち合わせを行った。
7．5．	ふれあい農業学園整備に伴う予算調整が行われた。
7．5．9	日本海テレビ番組「プラス１」の取材がなされた。
7．6．21	建築に障害となる樹木の移転作業が開始された。
7．6．20	竹本英行次長が八東町助役に選任され、後任に石田朋昭次長が就任した。
7．7．	鳥取県青年の翼洋上セミナーに本校の学生４名が参加した。
7．8．17	高校生を対象に初めて「ふれあい農業スクール」を開催した。（２泊３日、23名参加）
7．9．	建設主体工事の入札が行われ、西松建設・馬野建設・ダイトウ企業体が工事施工業者に決定された。
7．9．30	県畜産ふれあい祭りにおいて本校から泊小学校へ貸与している牛の「モモちゃん」が優良賞を受賞した。
7．9．	憩いの森予定地の山林の樹木調査を開始した。
7．10．27	泊小学校貸与の「モモちゃん」が本校で出産した。泊小３年生が立ち会うと共に、報道陣も多数来校した。
7．11．1	管理教育棟他新築工事の安全祈願祭が挙行され、工事の安全を祈願した。
7．11．16	中国四国ブロック教務担当者会議を本校で開催した。
7．11．17	第１回関金町マラソン大会が本校を会場として開催された。
7．12．	建築工事に向けて設計者、施工業者、学校が定例の工事打合せを週１回開催することになった。
8．1．22	日本海テレビ「農業大学校に女子学生急増」の取材が行われた。
8．2．14	中国四国ブロックプロジェクト発表会を本校で開催した。
8．2．	研究課題のカリキュラム検討を行う。
8．5．9	BSSテレビ「農大新入生の１ヶ月」取材が行われた。
8．5．	ゆとりの時間を活用して校外ボランティア活動を開始した。 （地域と密着した活動：バス停清掃、梨の袋かけ等。）
8．5．14	短期研修を円滑に行うため短期研修運営連絡協議会を開催した。
8．6．	シンボルタワーの着工等工事が順調に進む。
8．8．27	県政番組の日本海テレビ取材が行われた。
8．10．9	受精卵移植スーパーカウの双子が生まれた、その後もすくすく育った。
8．10．11	韓国江原道農民教育院研修生41名が来県した。
8．10．26	都会からの農業体験セミナーが本校で初めて開催された。
8．11．19	野菜・花き現場教室が完成した。
8．11．	園芸・畜産試験場併設の研修所を、本校専門技術課程とすることについての調整が続けられた。

９．１．	旧食堂・学生寮の取り壊し作業が始まった。
９．２．	新校舎の完成や積極的なPRが奏効し農業大学校になって定員（30名）を上回る34名の応募者があった。
９．２．	養成課程の教科に初めて林業関係の講義を取り入れた。
９．２．24	初めて専門技術課程の入学試験を実施し２名が合格した。
９．３．10	初めて研究課程の入学試験を実施し３名が合格した。
９．３．	学校整備のうち先に完成した学校教育部門の建物へ移転作業が始まった。
９．３．28	「鳥取県立農業大学校管理規則の一部を改正する規則」が公布された。（鳥取県規則第26号） これにより ☆養成課程の花き科の設備 ☆研究過程の設置 ☆専門技術課程の設置 ☆教科内容・時間数 などがあたらしく定められた。
９．４．	学校教育部門の建物・施設の供用を開始した。
９．４．11	新装となった体育館にて入学式を挙行した。
９．４．	全国農業大学校機関誌NOHO新聞の取材が行われた。
９．５．31	県政テレビ「とりっ子クラブ」の番組の取材が行われた。
９．７．	山陰夢みなと博開幕
９．８．	中型バスを新たに購入した。建築工事も急ピッチで進んだ。
９．９．２	定礎式を挙行、揮毫は西尾知事、ボックス内に学校の記録等を封入した。
９．９．	一時移転していた樹木の復元工事が始まった。
９．９．25	国際農業交流館等の引き渡しが行われ、新しい学校案内も完成した。
９．10．16	中国地区農業大学校スポーツ交流会を本校で開催した。
９．10．28	農業大学校落成式を挙行した。 ふれあい農業学園の名称で進めて来た学校整備も全て完了し、落成式を河本副知事他多数の来賓出席のもと盛大に行われた。 記念講演：アン・マクドナルド女史、 アトラクション：獅子舞、韓国民謡舞踏、さいとりさし
９．11．	新たに購入した林地の檜を間伐、製材し手作りで牛小屋を建築した。
９．12．16	創立70周年記念事業役員会を開催し、本格的な活動を開始した。
９．12．27	県政番組BSS“とりっ子クラブ”10大ニュースの９位に農業大学校がはいった。
10．１．21	建設テレビジョン“大規模木造建築探訪”の取材のため東京より来校。
10．２．５	パソコンを活用して第１回情報処理研修を実施した。
10．３．14	国際農業交流館で“日本文化・農業教室”を開催、外国からの交流員留学生等が日本文化・農業について理解を深めた。
10．３．14	赤崎町の家畜市場で開催された第13回Ｂ＆Ｗショー未経産の部において本校から出品のカレッジヒル　ローマン　クローネ　クイーン号がグランドチャンピオンに輝いた。
10．５．18	モンゴル国中央県より農業技術研修員２名来校、８月14日まで農大で研修

	を実施。エルデネバト（男性）、アリマントヤ（女性）
10. ５. 19	島根農大との交流会を本校で開催した。
10. ６.	農業大学校紹介ビデオ「新しき農の時代」が完成した。
10. ７. 10	普及事業50周年記念大会が県民会館で開催された。
10. ７.	鳥取女子短期大学の学生による図書の整理がなされ図書館も充実した。
10. ７. 29	鳥取県新規採用教職員研修が定着し好評であった。テレビ・新聞等報道関係にも取り上げられた。
10. ９. 19	ふれあい国際理解講座を英国展示会（２週間）と合わせて開催した。
10. 10. ７	平成10年度鳥取県景観大賞に農業大学校が選ばれた。
10. 10. 16	モンゴル国中央県ゴンビーン、ダシュレンツェン副知事が来校された。
10. 10. 25	平成10年度「ワンパク農業スクール」「日曜農業教室」（６月から10月まで第４日曜日開催）盛会裏に終了した。
10. 10. 26	中国地区農業大学校校長会議を本校において開催した。
10. 11. 20	創立70周年記念式典が農業大学校体育館で開催され、西尾知事の列席のもと盛大に開催された。元農業大学校長田中道宣氏の「山畑百姓10年とこの頃おもうこと」と題して記念講演が行われた。
11. ２. 22	学生教育・生活指導を強化するため校内ワーキンググループで検討されていた改善事項がまとまり、舎監と指導職員との定期的な協議、学生女子会の設立、学生会規約の改正が職員会議で決定された。
11. ４. １	米澤輝夫校長が定年退職され、第15代有松幸登校長が就任された。
11. ４. ２	中国六県ホルスタイン改良協議会主催の第15回中国地区Ｂ＆Ｗショウにおいて、本校出品牛カレッジヒルアパッチクローネラブリーが未経産リザーブグランドチャンピオンを受賞した。
11. ６. ３	関金町身体障害者福祉協会主催の身体障害者・農業大学校生「ふれあいグランドゴルフ交流会」が円形広場で開催され、養成課程１年生31名が交流を深めた。
11. 11. 10	（国立）韓国農業専門学校日本研修団35名が来校、国際交流館に宿泊し、本校学生会との交流会、日韓農業青年シンポジュームが開催された。
11. 12. １	鳥取県と韓国江原道友好５周年を記念して、江原道金知事と本県片山知事の一行が本校を見学した。
11. 12. 14	東京虎ノ門パストラルにおいて第10回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校研究課程１年安食千恵子さんが応募した作文が金賞を受賞した。
12. ２. 22	開学記念日の記念行事として、学生会が主催して「来て、見て、作って、ふれあい交流会」と銘打ち関金町内の高齢者28人を招待して、学生といっしょにソバ打ち、中華饅頭作り、校内見学を実施した。この年から開学記念行事は学生会の自主的活動の一環として実施されることになった。
12. ２. 23	企画部女性青少年課主催の「青年と知事が語る会」が本校大教室で開催され、「農業青年の夢」をテーマに片山知事との懇談会が実施された。本校からは果樹科１年福永ルミ子さん、畜産科２年別所昌治君が意見発表を行った。

12. 2. 24	全国農業大学校協議会主催の全国農業大学校プロジェクト発表会が東京で開催され、本校から養成課程果樹科２年山根浩幸君が「若木でのナシゴールド二十世紀の適正着果基準の策定」と題して発表、全国農業大学校協議会長賞を受賞した。
12. 4. 1	専門技術課程に林業技術者養成のための森林科が新設され、担当する教務主任１名と非常勤職員１名が配置された。入学する１期生は５名。
12. 5. 22	県・市町村行政懇談会が本校国際交流館ホールで開催され、知事ほか県内市町村長が参集し農業大学校施設を見学した。
12. 10. 23	この年から養成課程２年生の修学旅行先が、国際感覚の涵養を目的に韓国となり、ソウルを中心に実施され、国立農業専門学校の見学も実施された。
13. 1. 25	東京虎ノ門パストラルにおいて第11回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、論文の部で本校研究課程２年安食千恵子さんが「私のグリーン・ツーリズム論」で優秀賞を受賞した。また作文の部で研究課程１年尾崎佐和子さんが金賞、養成課程果樹科２年川上真司君が銅賞を受賞した。
13. 2. 21	平成５年から検討されていた「21東ほうきふるさと構想」の一環としての関金町大山池周辺での農業公園構想が、集客への危惧、財政状況等から計画の見直しが進められ、平成９年から10年にかけて田園空間博物館整備事業を活用し農業資料館、体験農園等施設を農大周辺に整備する方向で県農村整備課が計画を進めていたが、広く一般県民からの意見を聴くため、「農業体験館及び体験農園のあり方に関する意見交換会」が農業大学校会議室で開催された。
13. 4. 1	有松幸登校長が定年退職され、第16代校長足立恵一氏が就任された。 組織定数が改正され、総務課主任が１名減となり、それまで教務研修科として３名と配置されていたのが、教務科と研修科に分離され、それぞれ２名づつ配置された。
13. 7. 11	懸案であった女子寮の建設に向けて、県経営指導課は農業研修教育施設整備事業（国補事業）で取り組むべく農政局との協議を続けていたが、建設費388百万円で基本設計、概算工事価格ができあがり農政局経営課長と県経営指導課長との協議がなされ、平成13年度、14年度の２か年にわたって取り組むことが確認された。
13. 10. 17	西日本ブロック農業者研修教育施設指導職員「野菜部門」担当者会議が米子市を中心に開催され、西日本ブッロク17県からの参加があった。
13. 10. 29	農業資料館、体験農園等施設の整備計画に関連して、校内で検討されていた農業大学校施設の拡充整備に関する計画案の検討会が本校で開催され、鳥取短大中嶋教授ほか外部有識者の意見を求め、実践教育、教育環境の整備と併せて周辺地域との連携方策について協議された。
13. 11. 23	修農祭に修農会が初めて農産物販売コーナーを設けナシ、柿、野菜、米などの販売がOBによって実施されるようになった。
13. 12. 27	第２回目の農業大学校の拡充整備に関する検討会が外部有識者の出席のもと開催された。

14. 1. 25	東京虎ノ門パストラルにおいて第12回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校研究課程１年小林由幸君が応募した作文が銀賞を受賞した。
14. 3. 7	第３回目の農業大学校の拡充整備に関する検討会が外部有識者の出席のもと開催された。そこで農大研修教育機能整備方針（案）が協議され、平成14年度からの教育カリキュラム改正、研究課程の派遣教育方法の見直し、水稲等作物教育の強化、研修指導職員の新規配置、多様な体験メニューの整備などを実施する方向でまとまった。
14. 4. 1	組織定数が改正され、研修科改良普及員１名が増員された。 改正された新カリキュラムが施行された。主な改正点として、養成課程ではゼミ方式科目を導入、選択科目の増加(作物Ⅱ、農業経営演習)を行い、研究課程ではそれまでの11か月の試験研究派遣期間を２か月に短縮し、２学年のプロジェクト課題設定演習は農業大学校で実施することとなった。
14. 5. 10	離転職者を対象とした県立倉吉高等技術専門校農業科の訓練が、本校で実施されることとなり入校式が行われた。第１期入校生は３人。
14. 11. 6	県市場開拓課の仲介により、兵庫県加古川市にあるスーパーマーケット（イトーヨーカ堂）での販売体験実習が始まり、果樹、野菜、花きの本校産農産物を養成課程２年生が販売した。
15. 1.	東京虎ノ門パストラルにおいて第13回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程１年山本祐一君が応募した作文が銀賞を受賞した。
15. 3.	平成14年４月から着工していた寮室30室３階建ての女子寮が完成し、女子が移動した。同時にそれまで入寮できなかった研究課程、専門技術課程の学生も入寮できるようになった。
15. 4. 1	組織定数の改正により、教務科に作物担当の講師が１名配置されることとなった。同時に教育研修部職員が、教授(課長補佐級)、助教授(係長級)、講師という職名に変更された。
15. 10. 22	第21回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが本県で開催され、赤碕町運動公園多目的広場、船上山少年自然の家を主な会場として、中国地区６農業大学校学生のスポーツ交流が行われた。
16. 4. 1	県組織改編により、農業大学校が農林水産部農政課の出先機関から農林水産部の本課の機関として位置づけられた。
16. 4. 1	鳥取県教育委員会所管の平成16年度現職教育内地留学により県立日野高等学校教諭坪倉寿樹氏が本校で６か月間バイオ、花きに関する課題研究を実施することとなった。
16. 4. 1	鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例が一部改正され、入学選抜手数料（2,200円)、入校料（5,550円）が新設され、年間授業料が12,240円から108,000円に引き上げられることとなった。
16. 11. 12	NHK総合テレビ番組「まるごとワイド鳥取」大学キャラバンで、農業大学校のキャンパス、各科教室訪問などが生中継され、県下に放映された。
17. 4. 1	県定期異動により足立校長は西部農林局長に転任、第17代校長真山育雄氏

	が就任された。
17. 5. 25	平成15年度から国の農業研修教育・農業総合支援センター施設整備事業を活用して進めてきた農業学習館が完成し、地元鴨川中学校の生徒の体験学習の機会に落成式を行った。
17. 7. 28	中国四国ブロック農業大学校教務担当者会議が、倉吉市グリーンスコーレせきがねで開催され、29日校内見学が行われた。
17. 11. 28	本校で職業安定法第33条の４項に基づく地方公共団体無料職業紹介事業を実施することになり、下中教育研修部長が職業紹介責任者に認定され職業紹介事業が開始された。
17. 12. 21	平成16年決算審査特別委員会報告が議会に提出され、「農業大学校のおいては研修部門の強化など一定の評価をするところであるが、卒業生の就農率が24％で年々減少傾向にあることは、費用対効果の面から憂慮すべき状況である。今後は担い手の育成を図ることを検討すべきである。」という文書指摘がなされた。
18. 2. 16	中国四国ブロック農業大学校プロジェクト発表会が倉吉市グリーンスコーレせきがねで開催され、29日校内見学が行われた。
18. 4. 8	平成16年度決算審査特別委員会の文書指摘を受けて、農業大学校の教育研修体系の基本的な見直しを進めることとなり、①教育課程カリキュラム、②魅力ある農業大学校（専修学校化の是非）、③全寮制教育の３課題について校内ワーキンググループで検討素案を作成し、外部有識者で構成する農業大学校機能強化検討懇談会で意見ききとりをしながら成案化することとなった。
18. 6. 12	決算審査特別委員会指摘を受け、若年未就労者（ニート・フリター）を対象とした農業体験研修（土と風の体験講座）を実施し１名の参加があった。
18. 7. 22	平成18年度自治体国際協力促進事業（モデル事業）としてモンゴル中央県農業支援多地域間プロジェクト事業が新たに始まり、これまでの本校における農業研修をフォローアップするため、山口祐助助教授及び山嵜正人助教授がモンゴル中央県に派遣され、現地での技術指導にあたった。
18. 7. 27	第１回農業大学校機能強化検討懇談会を開催し、①教育課程カリキュラム、②専修学校化について協議された。
19. 1. 16	第２回農業大学校機能強化検討懇談会を開催し、20年度に向けた具体的な教育研修体系の見直し及び専修学校化について協議された。
19. 1. 19	県議会経済産業常任委員会において、「農業大学校の教育研修体系の見直し」について報告がなされ、現状の養成課程、研究課程、専門技術課程の学生教育と研修課程を一元化し、19年度から養成課程を専修学校化することなどが確認された。
19. 1. 23	認定農業者や農業法人等の経営感覚を養成するため、新規に「農のスペシャリスト講座」を開講し、１月23日に農業法人経営管理講座、２月16日にマーケティング戦略講座を開催したが、延べ126名の多数が受講した。
19. 2. 1	環境保全型の農業を学習するため、取り組んでいた本校農場生産物の鳥取県特別栽培農産物認証の登録申請が、トマト類で認可された。

19. 2. 2	東京新高輪プリンスホテルおいて第17回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程１年山本将人君が応募した作文が銅賞を受賞した。
19. 2. 9	第３回農業大学校機能強化懇談会が開催され、20年度に向けて全寮制を希望入寮制に変更することについて協議された。
19. 5. 8	平成９年度から実施していた日曜農業教室を廃止し、20年度から実施予定の短期研修科の試行として新規就農を目指す人を対象とした「アグリスタートアップ研修」を開始し、開講式を平井知事列席のもと開催した。
19. 7. 22	第９回全国和牛能力共進会鳥取県最終予選会が、鳥取県中央家畜市場で開催され、３区（若雌の２）に本校から畜産科２年山形俊樹君と「ちよ」が出場し、健闘したが惜しくも準首席となり全国共進会の出場権は得ることができなかった。
19. 8. 25	モンゴル中央県派遣事業により、野菜科盛山勝一郎講師がモンゴル中央県に９月１日まで派遣され、現地での野菜技術指導に携わった。
19. 10. 27	平成19年度鳥取県畜産共進会が鳥取県中央家畜市場で開催され、和牛種牛の部第３区（若雌）に、本校から畜産科２年山形俊樹君と「ちよ」が出場し首席となり、さらに和牛種牛の部グランドチャンピオン賞を受賞した。
19. 10. 30	境港市夢港タワーにおいて、鳥取県モンゴル中央県友好交流10周年記念式典が行われ、真山育雄校長が列席した。このとき両県の友好提携協定が継続提携され農業研修事業は継続されることとなった。
19. 12. 16	平成20年度入学生一般入学前期入学選抜試験が実施され、新規に設けられた社会人特別入学枠に２名の社会人経験者が受験し合格した。また平成20年２月17日に実施された後期試験において１名が受験し合格した。
19. 12. 19	モンゴル中央県農業局長が来校し、学校施設の見学をした。このさい農業研修の受け入れについて感謝の言葉を述べられた。
20. 2. 1	東京虎ノ門パストラルにおいて第18回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が開催され、作文の部で本校養成課程果樹科１年植原証が銀賞、研究課程１年数數馬明展君が銅賞を受賞した。
20. 2. 26	本校養成課程卒業生に専門士（農業専門課程）の称号を付与することを認可する文部科学省の官報が告示された。これに付随して３月７日に鳥取県立農業大学校管理規則が一部改正され、正式に専修学校として位置づけられ、養成課程卒業証書の文面に専門士（農業専門課程）の授与が謳われることとなった。 養成課程（22名）、研究課程（１名）、専門技術課程（１名）の卒業式を挙行した。養成課程の卒業生には専門士（農業専門課程）の称号が与えられた。
20. 4. 1	真山育雄校長が定年退職され、第18代校長藤原明康氏が就任された。県組織定数の改正により、総務課で１名減、教育研修部で２名減となり、正職員定数は19名となった。
20. 4. 1	鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例及び鳥取県立農業大学校管理規則の一部改正が施行され、次の事項が改正された。 ①養成課程の果樹科、野菜科、花き科、畜産科が養成課程農業経営学科と

なり、果樹コース、野菜コース、花きコース、作物コース、畜産コースの５つの専攻コースとなった。②研究課程、専門技術課程は廃止された。③研修課程のうち就農研修部分は短期研修科となり３か月、６か月、12か月の３コースとなった。④授業料が月額108,000円から111,600円に引き上げられた。また短期研修科に受講料（月額10,000円）を徴収することとなった。⑤講義の聴講制度を導入し、聴講料１時限につき125円徴収することとなった。⑥養成課程の全寮制が廃止され希望者に対する許可入寮制となった。

20. ４. 15	養成課程農業経営学科の入学式を挙行した。新入生21名のうち３名が、新たに導入した「社会人特別入学制度」による入学者であった。
20. ４. 22	新たに設置した「研修課程短期研修科」の第１回目の開講式を行った。研修生は、３ヶ月コース６名、12ヶ月コース１名の計７名であった。
20. ５. 15	モンゴル中央県農業局の農業専門家トゥグスオチル・バヤルフー氏が、７月10日までの約２ヶ月間、野菜を中心とした研修をされた。
20. ５. 26	農林経済・流通・マーケティング分野などの著名な講師を全国から招いて実施する「オープンカレッジ（公開講座）」（年10回開催）を開始した。第１回目の講義は、鳥獣害対策専門員の平田滋樹氏による「鳥獣被害の現状と具体的な防除法」であった。
20. ６. 17	学生が丹精込めて作った農産物を自らの手で販売する「農大市」が実現し、約60名のお客様が訪れた。学生自らが商品のパッケージ、ポップ広告、販売等を行った（本年度は７回開催）。
20. ７. ２	本年度第２回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。
20. ７. 12	平成20年度モンゴル中央県派遣事業により、野菜科盛山勝一郎講師が、モンゴル中央県に７月19日まで派遣され、現地で野菜技術指導を行った。
20. ７. 15	本年度第３回目の「農大市」を開催し、約130名のお客様が農産物を購入された。
20. ７. 29	高校生等を対象とした「オープンキャンパス（ふれあい農業スクール）」を７月30日まで１泊２日の日程で、本校を会場に開催した。参加者は23名であった。
20. ８. ２	鳥取県内で農業を始めたいという人を対象とした「ふるさと体験ツアー」を８月３日まで１泊２日の日程で、本校と現地を会場に新たに開催した。担い手育成基金との共催で行い、参加者は16名（うち８名が県外者）であった。
20. ８. ５	農業大学校西日本ブロック作物担当者会議が８月６日までの２日間、本校及び県内で行われた。
20. ８. 22	本年度第４回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。
20. ９. 10	本年度第１回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程１年の11名が量販店での販売を学んだ。
20. ９. 17	本年度第５回目の「農大市」を開催し、約60名のお客様が農産物を購入された。

20. 10. 8	第26回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが10月９日までの２日間、蒜山高原で開催され、ソフトボールの部で本校が３回目の優勝を果たした。
20. 10. 15	本年度第６回目の「農大市」を開催し、約110名のお客様が農産物を購入された。
20. 10. 19	創立80周年記念式典が農業大学校体育館で開催され、藤井副知事の出席のもと盛大に開催された。式典終了後には、山陰国民高等学校設立期成同盟会の副会長であった倉繁良逸氏が開校式当日に読み上げられた「山陰国民高等学校設立経過並びに工事報告」を公開するオープンセレモニーが行われた。
20. 11. 6	本年度第２回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程１年の10名が量販店での販売を学んだ。
20. 11. 23	恒例の修農祭が学生会の主催で開催された。今回初めて外部の音楽グループ「届け人」によるライブが行われた。
20. 12. 10	本年度第７回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。
20. 12. 20	日本農業技術検定協会（事務局は全国農業会議所）主催による日本農業技術検定２級試験が実施された。本校からは15名が受験し、９名が合格した（全国の合格率は約20％）。
21. １. 30	第19回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京虎ノ門パストラルで開催され、作文の部で本校養成課程１年の植岡壮平君が応募した作文「失敗を乗り越えて」が銀賞を受賞した。
21. ２. 5	平成20年度中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会が２月６日までの２日間、徳島市で行われ、本校代表として発表した養成課程２年の山本智史君と植原証君がともに優秀賞を受賞した。
21. ２. 25	第11回全国農業大学校等プロジェクト発表会が２月26日までの２日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。中国四国ブロック代表として発表した研究課程２年の数馬明展君が優秀賞（農林水産省経営局長賞、研究課程で１位）を、養成課程２年の山本智史君と植原証君がそれぞれ優良賞（全国農業大学校協議会長賞）を受賞し、本校始まって以来の快挙となった。
21. ３. 12	養成課程及び研究課程の卒業式を挙行した。養成課程26名、研究課程３名が２年間の学業を修業した。養成課程の26名には専門士（農業専門課程）の称号が与えられた。
21. ４. 9	養成課程農業経営学科の入学式を挙行した。新入生は21名であり、各コースの入学生数は、果樹４名、野菜８名、花き３名、作物４名、畜産２名であった。
21. ４. 21	短期研修科３月コースと12か月コースの開講式を行った。３か月コース４名、12か月コース７名、計11名の受講者があり、そのうち10名が野菜専攻、１名が花き専攻であった。
21. ５. 28	恒例の島根県立農業大学校との交歓会を29日までの２日間、本校を開場に開催した。２日目のソフトボール大会では本校Ａチームが優勝した。

21. 6. 9	前期技術競技を実施した。１年生の上位入賞者は、奥谷君、徳山君、松上君、同２年生は、中谷君、植岡君、今村さん（社会人）であった。
21. 6. 18	本年度第１回目の「農大市」を開催し、約90名のお客様が学生たちの生産した農産物を購入された。本年度からレジスターをバーコードつきのものに代えた。
21. 7. 2	本年度第２回目の「農大市」を開催し、約120名のお客様が農産物を購入された。
21. 7. 16	本年度第３回目の「農大市」を開催し、約150名のお客様が農産物を購入された。今回は新聞、防災無線のほかにNHKでも放送されたこともあって多くの来場者があり、レジは大混乱した。
21. 7. 18	本年度第１回目の「ふるさと就農体験研修」を19日まで１泊２日の日程で、担い手育成基金との共催で開催した。県内で就農を希望される21名（うち８名が県外者）が本校と現地を中心に研修をされた。
21. 7. 21	短期研修科３月コースと６か月コースの開講式を行った。３か月コース７名、６か月コース３名、計10名の受講者があり、すべてが野菜専攻であった。
21. 7. 25	本年度第１回目の日本農業技術検定２級試験が実施された。本校からは３名が受験し、２名が合格した。（全国の合格率は15％）。
21. 7. 28	高校生等を対象とした「オープンキャンパス」を７月29日まで１泊２日の日程で、本校を会場に開催した。参加者は22名であった。
21. 8. 24	作物コースと畜産コースの２年生が、９月18日までの日程で農家留学研修を実施した。果樹、野菜、花きの各コースは１週間遅れて８月31日から９月25日までの実施となった。東は長野県から西は熊本県までそれぞれ先進農家に滞在し、実際の農業経営や農家生活を体験した。
21. 8. 27	本年度第４回目の「農大市」を開催し、約80名のお客様が農産物を購入された。
21. 9. 9	本年度第１回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程１年の10名が量販店での販売を学んだ。
21. 9. 14	モンゴル中央県の研修生ミャグマル・ダシドラム氏が11月６日までの約２か月間、本校でキュウリ、トマトなどの野菜を中心に研修をされた。
21. 9. 25	本年度第５回目の「農大市」を開催し、約60名のお客様が農産物を購入された。
21. 10. 7	第27回中国ブロック農業大学校研修生のつどいが10月８日までの２日間、本校を会場に開催された。運営は本校の学生たちが中心となって行い、素晴らしい交流会となった。２日目は台風の影響で雨天となり、ソフトボールはソフトバレーボールに代わった。本校は昨年に続いて２連覇を達成し、卓球の部でも第３位となった。
21. 10. 16	本年度第６回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。
21. 10. 20	短期研修科３月コースの開講式を行った。受講者は６名であり、全員が野菜専攻であった。本年度の受講者はこれで27名となり、昨年度全期の24名を越えた。社会情勢の急速な変化により就農希望者が増加していることが

うかがえた。

21. 10. 23　養成課程農業経営学科の入学選抜試験（推薦入学）を実施した。15名が受験し、全員が合格した。

21. 11. 5　本年度第２回目のイトーヨーカ堂販売実習を兵庫県加古川市で行った。養成課程１年の11名が量販店で実習した。

21. 11. 14　本年度第２回目の「ふるさと就農体験研修」を15日まで１泊２日の日程で、本校と現地を会場に開催した。担い手育成基金との共催で行い、参加者は21名（うち11名が県外者）であった。

21. 11. 19　本年度第１回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。今回のテーマは「いちご・トマトの栽培技術」であり、いちごの高設栽培と大玉トマト栽培のポイントについて学んだ。

21. 11. 20　後期技術競技を実施した。１年生の上位入賞者は、奥谷君、高山君、徳山君、同２年生は、中谷君、植岡君、今村さん（社会人）であった。

21. 11. 23　修農祭が学生会の主催で開催された。小春日和の絶好の天気となり、約1,200人のお客様で賑わった。

21. 12. 3　本年度第２回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。「食の安全・安心発信」が今回のテーマであり、GAPについて学んだ。

21. 12. 4　本年度第３回目の「農のスペシャリスト講座」を開講した。「マーケティング戦略」が今回のテーマであり、パッケージづくり等について学んだ。

21. 12. 10　「鳥取へIJU！アグリスタート研修事業」（緊急雇用創出事業）の一環として農大が担当する「農業大学校サポート研修」を開始した。10日から11日まで「農業基礎集中講座」、14日から22日まで「農業機械研修」を実施した。

21. 12. 10　本年度第７回目の「農大市」を開催し、約70名のお客様が農産物を購入された。

21. 12. 13　養成課程農業経営学科の入学選抜試験（一般入学前期及び社会人特別入学前期）を実施した。10名が受験し、９名が合格した。

21. 12. 19　本年度第２回目の日本農業技術検定１級・２級試験が実施された。

22. １. 19　卒業論文発表会を開催した。審査の結果、第１位が吉川徹君、第２位が植岡壮平君、第３位が藤原綾さんと奥田慎也君に決定した。

22. １. 29　第20回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会がメルパルク東京で開催され、作文の部で本校養成課程２年の中谷好孝君が応募した作文「桃源郷を夢見て……私が目指す果樹栽培への挑戦」が銅賞を受賞した。

22. ２. 2　平成21年度中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会が２月３日までの２日間、山口県防府市で行われ、本校代表として発表した養成課程２年の植岡壮平君が優秀賞を受賞した。

22. ２. 14　養成課程農業経営学科の入学選抜試験（一般入学後期及び社会人特別入学後期）を実施した。11名が受験し、全員が合格した。

22. ２. 23　第12回全国農業大学校等プロジェクト発表会が２月24日までの２日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。中国四国ブロック代表として発表した養成課程２年の植岡壮平君が優良賞（全国農業大学校

	協議会長賞）を受賞し、本校は２年連続の快挙となった。
22. ３. 11	養成課程の卒業式を挙行した。養成課程21名が２年間の学業を修業した。養成課程の21名には専門士（農業専門課程）の称号が与えられた。
22. ４. １	藤原明康校長が定年退職し、第19代校長として下中雅仁校長が就任した。H22、23年度は本校校長が中四国ブロック農大協会長及び全国農大協副会長を務めた。 従来の職名「助教授」が「准教授」に改名された。
22. ４. ６	養成課程に30名の定員を上回る33名の新入生が入学した。
22. ９. 17	前年度まで大阪ヨーカー堂で実施していた流通販売実習を日吉津のイオンに変更して実施。
22. 10. ５	中国ブロック農業大学校研修生（島根県）のつどいでソフトボール優勝。
23. １. 22	全国農大プロジェクト発表会に合わせて初めての意見発表会を同時開催することになり、第１回校内意見発表会（養成課程１年生）を開催した。
23. １. 27	中国四国農業大学校プロジェクト発表会(高知県)で開催され、中国ブロック意見発表会が同時開催された。
23. １. 27	養成課程野菜コース１年生の近藤昌平さんが、ヤンマー学生懸賞作文の銅賞に入賞した。
23. ２. 22	開校記念行事として、校長先生が本校の生い立ちとその後の変遷について講話し、保護者会の後援の下食堂の協力を得て校内生産物をメインにした料理でバイキング形式の昼食会を開催した。
23. ２. 22	全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース２年の徳山達也さんが特別賞を受賞した。
23. ３. 26	３月11日に発生した東日本大震災の被災者支援に花き科遠藤英先生が石巻市に派遣（３/26～４/１）された。
23. ４. １	前年度に見直し検討してきた新カリキュラムを養成課程１学年に適用実施した(２学年は移行措置として旧カリキュラムを継続実施)。主な内容は、実習時間の増、６次産業化や社会貢献活動のカリキュラムへの導入など。
23. ６. 22	学校の外部評価（評価委員３名）を開始した。
23. ７. 18	農家等留学研修を一斉実施から７月中下旬～９月末の期間の適当な時期に実施可能とした。
23. ８. 22	果樹科河原拓先生が鳥取県職員災害応援隊（第28陣）として東日本大震災の避難所支援のため石巻市に派遣（８/22～31）された。
23. ８. 22	東日本大震災で大きな被害を受けた東北３県にある農業大学校宛に、学生会が激励の寄せ書きを贈った。
23. 10. 17	校内マラソン大会を復活開催した（一方で、７月の海水浴は廃止した)。コースは、男子：大山池往復、女子：松河原果樹団地往復。
24. ２. 21	全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース２年近藤昌平さんが特別賞を受賞した。鳥取農大として２年連続の特別賞受賞。
24. ４. １	県の定期人事異動により下中雅仁校長は農林総合研究所長に転出し、第20代校長として安養寺寿一校長が就任した。

24. 8. 31	６次産業化の取り組みの一環として農大ブランド第１号に野菜科２年生橘叶さんのミニトマトゼリー“想いは叶う”を認定した。
24. 9. 23	流通販売実習を東部地区(“地場産プラザわったいな”)でも初めて開催した。
24. 10. 16	校内マラソン大会に替えて校内駅伝大会（職員を含む専攻コース対抗による校内20周回）を開催した。
24. 10. 25	長崎県で開催された第10回全国和牛能力共進会に鳥取県代表として本校から２頭を出品した。農業大学校からこの大会に出品するのは全国初。
25. 2. 19	全国農業大学校プロジェクト発表会で中四国代表として発表した養成課程野菜コース２年岡田有生さんが特別賞を受賞した。鳥取農大として３年連続の特別賞受賞
25. 9. 21	第30回全国都市緑化フェア（水と緑のオアシスとっとり2013）が、鳥取市の湖山池公園を主会場に開催され、本校花きコースも『「農」ヲ感ジテ…』と題して農大の風景をデザインしたガーデンを展示した。
25. 12. 12	管理棟や学生寮の給湯用の木質チップボイラー施設が完成し、点火式に招待した関金小学校の児童と学生会役員が種火をたいまつリレーし、ボイラーに点火した。この他、野菜・花きハウス暖房用に木質ペレットボイラーや地中熱ヒートポンプも完成した。
26. 3. 27	野菜コース職員がプロジェクト指導の功績で農林水産部長表彰を受賞した。平成20年度から６年連続で本校学生が中四国の代表として全国プロジェクト発表会で発表。特に野菜コース学生を平成22年度から４年連続の出場に導き、うち３名が上位入賞に輝いた。その指導の成果が評価された。
26. 4. 1	県定期異動により安養寺寿一校長は農林水産部次長に転任、第21代校長として爲計田ひろみ校長が就任した。
26. 8. 5	農業法人等への雇用就農が重要な進路の一つとなる中、初めて雇用就農情報交換会を開催し、農業法人等と学生・研修生の情報交換及び個別相談を行った。求人を考える農業法人等15社の参加があった。
26. 8. 7	モンゴル国中央県知事ドルジ・バヤルバト氏が来校された。
26. 8. 17	モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース竹内亮一講師がモンゴル中央県に８月24日まで派遣され現地での野菜技術指導に携わった。
26. 9.	自営就農者及び雇用就農者の大幅な増加を目指して、新たに就農を希望する社会人を対象とした農大研修の見直し拡充について検討、協議を開始した（政策戦略事業「次世代を担う農業人材育成研修事業」）。
27. 1.	牛舎のTMRミキサーを更新した。自走式タイプの導入で餌やりが大きく効率化された。
27. 2. 10	初めて「花育」活動に取り組み、花きコースの学生・研修生が関金保育園の年長クラスの園児たちに花の寄せ植えを教えた。
27. 2. 13	全国農業大学校等プロジェクト発表会が東京で開催され、養成課程野菜コース２年の嶋田雅俊さんが「小型パプリカ利用による着色安定と経営改善の検討」と題して中国四国ブロック代表として発表し優良賞を受賞した。
27. 3. 9	平成26年度養成課程農業経営学科の卒業式を行い20名の卒業生を送り出した。自営就農者５名（研修後の就農予定者を含む）雇用就農者11名で、就

	農率は80％と高い値となった（近年50％前後で推移）。
27．４．１	就農を目指す社会人向けの研修を改編して充実させるに伴い、研修科に研修調整員（非常勤職員）２名（うち１名は８月採用）、訓練指導員（非常勤職員）２名（うち１名は８月採用）が配置された。具体的には、短期研修科（３か月、６か月、12か月の研修）を改め、講義と校内での実習によって農業の基礎的知識と栽培（飼育）の基本技術を学ぶ12か月間のスキルアップ研修、１年間先進農家の元で実践的に学ぶ先進農家実践研修、３か月間のアグリチャレンジ研修（公共職業訓練）の３種類の研修を開始することとなった。
27．７．21	前期の雇用就農相談会（昨年度は雇用就農情報交換会）を開催した。本年度から２回/年の開催。
27．７．26	モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース竹内亮一准教授と下本奈津子実習助手の２名がモンゴル中央県に８月２日まで派遣され、平成10年度から受け入れている農業研修生の現地でのフォローアップとネットワークづくりを支援した。
27．８．６	農業大学校中国四国ブロック教務担当者会議を本校で開催した。
27．９．３	平成27年度担い手育成（新規就農支援）研究会～サマーキャンプin鳥取農大～が公益財団法人鳥取県農業農村担い手育成機構と鳥取県の共催で２日間の日程で本校を会場に開催され、新規就農者の支援にかかわる関係者約90名が集い県内の新規就農者の足跡や支援事例を学ぶとともに、情報交換し互いのスキルアップを図った。
27．９．	研修科に普及展示を兼ねた実習施設としてパイプハウス１棟（302.4㎡）を鳥取型低コストハウスの仕様で新設した。
27．10．８	中国ブロック農業大学校研修生のつどいを本校が担当して開催した。１日目は校内見学を行い、２日目は蒜山高原スポーツ公園を会場に中国ブロック６校の学生がソフトボールと卓球で交流した。
27．10．15	農業を志向する高校生（２年生）を対象として、就農等に向けた進路イメージの確立に役立ててもらうため就農イメージ相談会を試行的に開催した。内容は生徒の希望する専攻分野別に就農へ向けた情報提供と本校の学生とともに行う実習体験である。
27．11．１	鳥取県立農業大学校の設置及び管理に関する条例及び鳥取県立農業大学校管理規則の一部改正が施行され、次の改正が行われた。 新規就農者の育成増加を図るため新しく先進農家実践研修を始めるとともに短期研修科をスキルアップ研修に改める。 ①研修課程において実施する研修は先進農家実践研修及びスキルアップ研修とする。 ②受講料を徴収しない研修は先進農家実践研修とする。 ③就農計画の認定を受けようとする者が受講するスキルアップ研修については受講料を減免する。
27．11．	全天候型演習施設（大型テント施設タスコドーム）１棟（227.9㎡）を新設し、天候にかかわらず農作業・機械操作実習を行うことができる環境が

	整った。
27. 11. 5	産業人材育成センター倉吉校の委託を受け、公共職業訓練「アグリチャレンジ研修」を開始した。 農業従事希望者の基礎訓練として農業に関する基礎知識と農作業に要する基本技能を習得できる３か月間の訓練である。第１期生として募集定員20名に対し18名が入校した。
27. 11.	とっとり県政だより11月号に「農業の夢先案内人　県立農業大学校」の特集記事が４ページにわたって掲載された。
28. 1. 21	中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会を本校が担当して米子市で開催した。１日目は10校から２名ずつのプロジェクトの発表を行い、２日目は現地視察を行った。
28. 1. 29	第26回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京で開催され、作文の部で養成課程１年野菜コース石﨑朋江さんの作文が銅賞を受賞した。
28. 2. 1	新たに創設した先進農家実践研修の第１期の開講式を行った。この研修は、就農希望地において先進農家の元で実践的な技術と経営ノウハウを学ぶ研修で、市町村、農協、農業改良普及所等の様々な機関からなるチームが農業経営開始をサポートすることが特徴である。第１期生は２名でそれぞれ北栄町長芋生産部、湯梨浜町ブドウ生産部の先進農家のもとで１年間の実践的な研修を開始した。
28. 2. 23	全国農業大学校等プロジェクト発表会が東京で開催され、養成課程野菜コース２年の東進寛さんが「ネットメロン“フェリーチェ”で実家の経営改善」と題して発表、優良賞を受賞した。本校からの全国大会への出場は８年連続となった。
28. 4. 1	前年度から始まった公共職業訓練アグリチャレンジ科（アグリチャレンジ研修から名称変更）について、農作業の基礎技能を定着させるため、訓練期間を４か月に延長、１期定員を25名に増やす見直しを行うことに伴い、訓練指導員（非常勤職員）１名が増員配置された。
28. 4. 12	養成課程農業経営学科の入学式を行い21名が入学した。初めて海外(台湾)からの学生１名を受け入れた。
28. 7.	中国地方知事会では平成22年度から農業大学校の事務・施設等の共同化について広域連携部会を設置し、ワーキング会議を重ねて検討してきたが、農業大学校は各県の農業施策に基づいた教育を行っており、担い手育成の拠点として位置づけられるため統合は困難との結論に達した。検討の中で生まれた成果は今後も継続することとし、統合そのものについての検討は終了することとなった。
28. 8. 1	鳥取県で初めて食の６次産業化プロデューサー育成講座（レベル１から３の認証講座）が本校を会場に開催されることとなり、12月までの15日間の研修が始まった。受講者は本校の学生・研修生で希望する者10名、一般参加者18名、農林水産分野の県内高校生６名と県職員12名の合計46名であった。
28. 10. 21	午後２時７分鳥取県中部地域を襲った最大震度６弱の地震により本校も大

きな揺れに見舞われた。人的な被害はなく、当日は推薦入試の日であったが、試験も無事終えることができた。瓦の脱落や水道管、冷暖房配管の損傷、晩生梨「王秋」の落果などの被害があった。水の確保が十分できなかったことからアグリチャレンジ科と研修課程は１日、養成課程は３日間の休校とした。

28. 12. 16　平成27年度決算審査特別委員会報告が議会に提出され、農業大学校について「農業大学校職員の学生指導のスキルアップならびに農業高校と農業大学校をつなぐ連続性のある教育実践ができるよう、農業大学校と農業高校の間に、可能な範囲での人事交流、情報共有など連携のあり方を検討すべき」との口頭指摘がなされた。

29. 3.　なし「豊水」の園を廃し、跡地に鳥取県育成のなし新品種「新甘泉」「秋甘泉」のジョイント仕立て用の大苗を植えた。２品種を交互の列にジョイント仕立で植え、受粉作業が不要、早期多収に優れ、単純化した樹形で新規就農者にも取り組みやすいなどが期待される。

29. 4. 1　爲計田ひろみ校長が定年退職し、第22代校長として小林智子校長が就任した。

29. 4. 1　初の試みとして、鳥取湖陵高校の農業教諭１名が指導力と専門性向上を図るために農大へ１年間の研修派遣された。農林技師である農大職員が教育の専門家である農業高校教諭から授業の進め方や教育方法を学びスキルアップとなった。

29. 4. 11　鳥取県とモンゴル中央県の友好交流は20周年を迎え、モンゴル中央県からバグジド・バトジャルガル知事率いる９名の代表団が来県され、満開の桜が咲く農業大学校で記念行事と農場視察が行われた。記念式典では、中央県からモンゴル中央県親善協会と農業大学校に名誉勲章が授与された。中央県知事、平井知事、河本親善協会会長らが、円形広場に桜（ソメイヨシノ）を記念植樹された。

29. 7. 4 ～10. 25　本年４月に国家戦略プロフェッショナル検定の食プロ育成講座実施機関の認証を取得し「食の６次産業化プロデユーサー養成講座（25科目）」を開講した。農業高校から51名、一般４名が受講し全員が修了した。

29. 7. 28 ～7. 29　モンゴル中央県で開催された友好交流20周年記念式典に副知事を団長とする交流団が招待され、農大からは小林校長が参加した。モンゴルでは鳥取県が支援している農業・医療施設や日本語学校の視察を行った。中央県農業局や農大で学んだモンゴル研修生の大規模野菜ハウス農場の訪問などで農大との交流による農業の発展ぶりを視察した。

29. 8. 7 ～8. 12　モンゴル中央県農業専門家派遣事業により、野菜コース久重祐彦教授が派遣され、現地での野菜栽培指導を行った。

29. 8. 22　第４回鳥取県農作業安全標語コンクールで野菜コース２年門脇幸律さんが標語「農作業　今日も一日　NO事故デー」で最優秀賞を受賞した。

29. 9. 7 ～9. 11　宮城県仙台市で開催された第11回全国和牛能力共進会の第４区（しば系統雌牛群）に農大の「はちこう」を出品し、14県14群中で鳥取県の過去最高成績となる優等賞４席と肋張賞を獲得した。畜産コース２年の近藤あゆみさんがハンドラーを、津村恒士郎さんが補助員を務めた。「白鵬85―３」

「百合白清」のスーパーブランド牛の誕生で、鳥取県は７区肉牛の部１位などで総合５位の好成績となり鳥取和牛のブランド力を全国に発信することができた。

29. 10. 7　鳥取県中央家畜市場で開催された鳥取県畜産共進会乳牛の部４区（未経産20―24ヶ月齢）に農大から出品した「シラタマ・アンミツ号」が「優等賞首席」のグランドチャンピオンとなった。ハンドラーを畜産コース１年の吉田隆晴さんが務めた。

29. 10. 12　はじめて保護者会主催による保護者参観日が開催され、農場実習参観と農大職員との意見交換を行った。保護者は13名参加された。

29. 12. 19　平成30年度に県下初のグローバルGAPを梨で取得することを目指し取組を始めた。一般社団法人GAP普及推進機構担当者や青森県五所川原高校山口章校長を招き、「学生が主体性を持って取り組むグローバルGAP取得」に向けた指導方法や教育的効果などについて講演いただいた。山口校長による特別講演会には、学生、農業高校教諭など60名が参加した。

29. 12　鳥取大学農学部編入試験に初めて果樹コース２年生の１名が合格し、平成30年４月に生命環境農学科３年に進学することとなった。

30. １. 26　第28回ヤンマー学生懸賞論文・作文コンクールの入選発表会が東京で開催され、作文の部で養成課程果樹コース１年の三谷綾香さんの作文「梨の子～過去から未来～」が銅賞を受賞した。
また、作物コース１年の福留芳洋さんの作文「私の信じること」は奨励賞を受賞した。

30. ２. 1　過疎・高齢化などによる集落営農組織の後継者不足が社会問題となる中、集落外からの後継者を求める農事組合法人が農大の先進農家実践研修生を受け入れ、研修終了後に法人後継者として雇用就農する事例が初めて２組生まれた。
雇用就農先：（農）ファームなかいち（鳥取市河原町）、（農）やまのうえ（八頭郡八頭町）

30. ２. 12～２. 14　全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会が東京で開催された。
プロジェクト発表では、果樹コース２年の笹原洸希さんが「自分の選んだ先に～シャインマスカットに込めた夢」と題して、意見発表では果樹コース１年の三谷綾香さんが「反撃せよ、未来を求めて」と題して発表し、それぞれ優良賞を受賞した。本校からの意見発表全国大会への出場は初となった。

30. ４. 1　時代に即した学校教育とするために管理規則改正を行った。食の安全、労働安全、環境保全を確保するグローバルGAPの実践を行う「生産工程管理」を新たな科目として追加した。４年制大学編入に対応したカリキュラムの統合、名称変更を行うとともに授業時間を45分を単位とする時間から60分を単位とする時間に変更した。

30. ４. 11　養成課程経営学科の入学式を挙行した。新入生24名のうち１名が全国初の技術認証制度である鳥取県スーパー農林水産業士（第１期生）の認定者であった。

30. 4. 13 ～	スキルアップ研修に、県内で栽培される主要野菜４品目（白ねぎ、ブロッコリー、スイカ、ミニトマト）の栽培管理技術習得をする短期研修（各４カ月間で５期）を新たに開講し、新規就農者育成を強化した。
30. 6	畜産課生乳の出荷先である大山乳業が「白ばら認証制度」を行うに伴いバルククーラー（生乳冷蔵保管タンク）に自動自記温度計を設置した。